

資源回復に寄与するニホンウナギの 効果的な放流手法の開発

(予算区分 [外部資金] 研究期間 2024～2026 年度)

担当：水産・海洋技術研究所 深層水科 青島秀治
浜名湖分場 山本高宏

【研究の背景とねらい】

- ・ニホンウナギ（以下、ウナギ）の資源減少対策としてウナギの放流が行われていますが、放流魚の生き残りや産卵への参加についてはほとんど解明されていません。
- ・このため本研究では、効果的な河川放流手法の開発や、産卵回遊が期待できる親ウナギの養成手法の開発に取り組んでいます。
- ・親ウナギ養成手法の開発では、性的成熟における養殖ウナギと天然ウナギの差異と、露地養殖池を利用した天然の親ウナギに近い親ウナギの養成の可能性について調べます。
- ・河川に放流したウナギの生き残りの調査では、発育段階や飼育履歴の異なるウナギを河川に放流し、放流後の残存や成長を調べます。

【これまでに得られた成果】

(2024 年度の成果)

＜河川に放流したウナギの生き残りの調査＞

- ・シラスウナギ 1,350 尾と養殖初期黄ウナギ 1,051 尾を 4 月に同時に河川に放流し、10 月に採捕を試みたところ、シラスウナギ放流群は 1 尾も採捕されなかった一方で、養殖初期黄ウナギ放流群は 13 尾採捕されました。今回の結果から、シラスウナギで放流するよりも初期黄ウナギへ育成してから放流した方が効果が高い可能性が示唆されました。

＜親ウナギ養成手法の開発＞

- ・養殖ウナギは天然ウナギよりも成長が良く、頭部が小さいなどの差異がありました。また、養殖ウナギは、天然ウナギと比較して肝臓のグリコーゲンが多い傾向が認められました。
- ・露地池に放養したウナギでは銀化の兆候が 7 月に認められましたが、8～9 月には退行しました。また、低温海水処理により、約 2 割の個体で銀化が出現しました。



露地養殖池

【期待される効果】

- ・効果的な手法で河川にウナギを放流することにより、成熟して河川を下り産卵に向かう親ウナギの数が増えます。さらに、産卵回遊する親ウナギを人工的に養成し放流することで、産卵に参加する親ウナギの数が増えます。ウナギの産卵数が増えることで資源の増加が期待されます。

【今後の計画】

＜河川に放流したウナギの生き残りの調査＞

- ・発育段階が異なるウナギの放流後の残存調査を湖沼において行います。

＜親ウナギ養成手法の開発＞

- ・性的成熟における養殖ウナギと天然ウナギの差異の把握と露地養殖池を利用した親ウナギの養成の可能性の検討を継続します。

(作成 2025 年 4 月)